



「ひらほく新聞」で検索!

★感謝で継続12年目に突入★

http://www.hirahoku.com/

☆ぜひ、バックナンバーをどうぞ!

発行所 読売センター平塚北部(ひらほく) 山本 直 〒254-0013 神奈川県平塚市田村9-4-32 電話 0463-54-2807

言葉の魔法



小林正観先生や斎藤一人さんつながりで、数年前からメルマガを受け取り、動画も拝見し学ばせていただいた。心理カウンセラー masahiro さんが、この度初めての書籍を出版。その『神様とシンクロする方法』(KADOKAWA)は、初版からカテゴリー別ベストセラーになるほど大反響。

「あなたの魂が目覚めてもらって、ミラクルばかりの幸せな人生を手に入れる方法」を紹介するための本だという内容、1人でも多くの方に知っていただきたいと、ご紹介いたします。

言葉の魔法

ミラクルを引き起こすためには、「あなたの魂」がしっかりと目覚め、神様の持つ幸運の波動とシンクロすることが重要です。

人は、魂で神様とつながっています。魂がゴキゲンであれば、魂は喜んで神様の波動とシンクロしてくれまします。しかし、私たちが成長をする中で受けるさまざまなノイズにジャマされると、魂はフキゲンになり、神様とシンクロしてもらえなくなります。

あなたの魂は、眠ってしまっていますか？
実は、魂に起きてもらう方法はとても簡単。「言葉を唱える」、これだけです。

言葉とは、神様の持つ幸運の波動を宿した言葉のこと。よい波動を宿した言葉で呼び

言葉の本との出会い

24歳の時に母親がうつ病を患い、立て続けに悪いことが起こる中で、どん底まで落ち込んだ時、やり場のないはけ口に、近所の神社に文句、悪態をつきまくるようになった。

「神様が本当にいるなら、奇跡を起こしてみよう！」と行き詰まって叫んだ数日後、書店に行くと、1冊だけ光り輝いている本が目に入った。それは、斎藤一人さんの言葉の本だった。

その本には、「よい言葉」「天国言葉」について、うれしい、楽しい、感謝して、あわせ、ありがとう、ゆるみます」を唱えていると口に出したとおりの良い人生になる。反対に「地獄言葉」「不平不満、グチ、泣き言、悪口、文句ばかりを言っていると、そのとおりの人生になる」と書かれていた。それはまさに現在の自分のことだと衝撃を受けた...

そして、「つついてる」「ありがとう」などのよい言葉を1日1000回、100日間続けると奇跡が起きるからやってみよう」と書いてあった。フラにもするがる思いで、神様、どうか母の病気を治してください！とその通りによい言葉、言葉を唱え続けた。

すると何と、90日くらい経ったところで、「治らないかもしれない」と言われていた母がすっかり回復！元気な母の姿を見ながら、「私の中にも魂は存在してくれていた！」「言葉の力って本当なんだ！」「奇跡は起こる！」と実感した。

心を込めなくても効果のある言葉

「ありがとう」は、世界一美しい響きを持った言葉で昔からたくさんの人々に使われてきたことで、私たちのDNAに刻まれており、想像を超えるほど大量のポジティブなエネルギーが積み重ねられている言葉。

なので、言葉の効果を体感するためには、まずは「ありがとう」を唱えることから始めてみるとよい。感謝のエネルギーがギュッと凝縮されている、とても強く強力なパワーを持った言葉だから、心を込めなくても大丈夫。あれこれ心配して試さないより、実際に行動してみることのほうがずっとずっと大切。

目覚めの「ありがとう」1000回ワーク

朝、ベットで目覚めた時に「ありがとう、ありがとう、ありがとう...」と、1000回つぶやく。

とっておきの最強言葉は「自分の名前」

ほかのどんな言葉よりもあなたの人生をより豊かに幸せにしてくれる、最強の言葉は、「あなたの名前」。

なぜなら、1人ひとりの名前には、ご両親の思いや願いが込められているから。たとえいまは、ご両親とうまくいっていないとしても、「自分の名前は、このよう

な考えでつけられている」と思えば、見方も変わってくるかもしれない。申し込み用紙や契約書などで自分の名前を書く機会があるときは、心を込めて丁寧に書いてみよう。(ここまで)

【追悼抄】

瀬戸内寂聴さんの朝日新聞連載「残された日々」より一話を紹介させていただきます。

買えなかった

ランドセル

一九二二（大正十一）年生まれの私は、現在九十四歳である。私が小学校に入学したのは、二九（昭和四）年四月であった。

その二ヶ月ほど前、我が家は引越して、私の入学する徳島市の新町尋常小学校に歩いて四分の近所に暮らし始めていた。幼稚園は徳島駅前に近い寺島尋常小学校の校内にあったので、新しい住まいの近くには友達が一人もいなかった。二人姉妹の姉は五歳年長だったので、転校は厭だと言って、毎朝、三十分歩いて寺島尋常小学校へ通い続けていた。父が莫大な借金を背負い、家が貧乏になっ

たことが幼い私には理解できず、四人家族の中で一人陽気であった。目前に控えた小学校入学が嬉しく、毎日浮き浮きしていた。器用な母は、古めかしいシンガミシンを一台持っていて、それで子供たちの服を手早く縫い、婦人雑誌の付録を見て、表紙の女の子が着ている服やオーバーを、そつくり編み上げて、

私たち姉妹に着せていた。私はそんな服を身につけていることが誇らしく、そんな器用な母がそれ以上に自慢であった。五つも年の差があるので、着物以外の下着や服は、姉のお古は合わなく、いつでも新しく作ってもらっていた。それほどまでに家が貧乏になったことを私はまだ全く気づくことができなかった。

入学が近づくと、母は私をつれて洋品店へ出かけ、私の新しい服を買おうとしたが、どれも気に入らない、私に似合わないと言って何も買わずに帰り、私の入学の服もミシンで縫ってしまった。その頃、母が夜なべに刺繍をしたり、その布で何かを作っていた。出来上がったのは、美しい花の刺繍のついた手さげ袋だった。「これ、ハアちゃんの新しいかばん」と言って私に手渡した。

「きれいだらう、おかあさん、刺繍上手でしょう」と笑顔で言った。私はその通りだと思っはしゃいでいた。しかし入学してみると五十人のクラスメートは、みんな革のピカピカするランドセルを背負っていた。ランドセルのない子は私をいれて、三、四人だった。「みんなのお母さんは、裁縫が下手で、刺繍も出来ないんだ」と私は無理に自分に言い聞かせていた。

そんなある日、担任のお

なかの大きくなった女の先生が、私の手さげを見て、手に持ち上げ、「まあ、きれい！お母さんが作ってくれたの？こんなきれいなかばん、どこにも売ってないよねえ！」と言ってくれた。

最近読んだ通販雑誌の特集記事に、新入学の準備金、小学一年生、六万三千三百円、中学一年生、八万三千二百八十五円が用意できなくて、子供の入学に悩んでいる親がたくさんいると載っていた。それらの家庭は「貧困状態にある」とされている。

ランドセルの平均価格は今、四万二千四百円だとか。国は他国に莫大な援助金を贈るゆとりがあるようだ。ランドセルが買えず入学に困っている子供たちがあつて、いいものだろうか。（二〇二六年十一月十一日）

ご自宅に眠っているランドセルはありますか？
当ミニコミの配信希望で
ご縁が繋がった、群馬県在住、高校教員のH先生が活動をされている「みんなの学校」では、不要になったけれど思い出がつまっていた、なかなか捨てられないランドセルや学生服の寄付を募集中です。◎連絡先は「みんなの学校」で検索↓
<https://www.minnano-gakkou.com/>

一声の大切さ

教えてくれた子

以前、書籍をご紹介した、10年来の知人、元神奈川県の公立中学校校長、全国教育交流会やまびこ会代表、子育て教育研究所所長の中野敏治先生のコラムより、

出張帰りのバスでの出来事です。車内は通勤帰りの方が多く乗っていました。次のバス停を知らせる車内放送が流れ、4歳くらいの女の子が降車ボタンを押しました。

バスが止まると、母親に手を引かれた女の子は、「運転手さん、バイバイ」と元気な声で手を振りました。運転手さんも、「バイバイ」と返事をしました。

運転手の声はマイクを通して車内に流れたので、何があったのだろうか、とちよつと驚いた様子の乗客もいました。しかし、その「バイバイ」の意味が分かると、車内の空気が変わったように感じました。
女の子と運転手との「バイバイ」のやり取りを聞き、仕事で疲れた人たちが一気に元気になったような気がしたのです。
さらに次のバス停で降りた方は、運転手に「ありがとうございます。ごうございました」と声を掛けました。その言葉に、運転手は「お疲れ様でした」と

と答えました。

その後、乗客たちは降りるとき、「ありがとうございます。ありがとうございました」と言うようになりました。その都度、運転手も「お疲れ様でした」とあいさつしました。

純粹で無邪気な子どもから、一声の大切さを教わった気がしました。（終わり）

|||||

せわしない年末へ向かう時期にこそ、ちよつと「ほっこり」という話題をもう一篇は、日本新聞協会主催の「新聞配達に関するエッセーコンテスト」、本年第28回の大学生・社会人部門【最優秀賞】の作品をお届けします。

大学受験も間近に迫り、気持ちに余裕がなくなりかけて迎えた2021年の元旦。その朝のポストには、朝刊と一通のお手紙が入っていた。「いつも新聞を購読いただきありがとうございます。先日は、大変うれしかったです。今年はあるたにとつて最良の年でありますように」と。

きっかけは昨年のクリスマス。気分転換のつもりで真夜中外に出ると、吹雪。この雪ではサンタさんのみならず、新聞配達員さんも

朝刊を届けるのは大変だろうと、雪かきをしてポストまで細い道をつけた。そしてクリスマスだったことを思い出し、板チョコにいつもありがたうのメッセージを添えポストに貼り付けた。翌日、お手紙はなくなっていた。

そして元旦の朝、わざわざお返事をいただけただけだ。中にはお守りが二つ。それを手にすると、見守り、応援してくれる人がいる幸せを感じ、心が熱くなり涙があふれた。

新聞配達員さん！ いただいたお守りを握りしめて受験した大学には無事合格。春から東京で一人暮らしを始めました。お守り大切にしますね！（終わり）

快晴に恵まれた先月二十日、久々のお休みに、家族で大山登山に出かけた。十数年ぶりで鈍った体が心配だったが、ケーブルカーに乗らず、下からいくなかでやはり不安が的中、左足の膝と付け根に痛みが出た。

有難く家族に励まされ3時間半で何とか登頂。重いポットを背負って登り食べたカップヌードルとおにぎりは本当に美味しかった。そして、もっと辛い下り。左足をかばって右太モモが

攣りそうに。痛みが引かないなか、そこで思い出し「俺の足、ありがたう！」と繰り返し唱えた。すると何と右足が回復！無事下山できた。言葉効果大感謝だった。

多くの日本人は、自分の欠点はかり口にして、自己肯定感を下げる一方だという。以前書籍を紹介した、精神科医・樺沢紫苑先生曰く、「自己肯定感を高める方法」で最も簡単なのは、「今の自分でOK！」「俺って最高！」を1日に3回言えはいい、だという。自己肯定感とは、「自分を肯定できる感覚」。行動（言葉）を最初に変えることで、感覚は後からついてくる。

年末号外で紹介したことのある、新年の初詣での願いごとより大切な年の瀬の習慣。一つが「108個の煩惱消し」。除夜の鐘の数、百八つの煩惱（やろうと思つてできなかったこと）を書き出して消すこと。そしてもう一つが、「大晦日の夕陽に感謝」。いままで生きてきて、お世話になった人で親族、先生、恩師、近所の人とか、これまでに亡くなった全ての人を、裏に思い出して「ありがたうございます」と心を込めて手を合わせる。

新年へ向け、ぜひ実践して、感謝で締めくくりたい。